

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり 時事新報には毎號詳細なる商況物價の報載あり

時事新報

第三千六百六十三號
明治廿四年十月十八日 (日曜日)
西曆一千九百一十一年
十月十六日 (丁丑)
日出版五時三十分
月入洋銀五元九角
半年洋銀三十元
年入洋銀六十元
廣告料は左の如し
第一版 一月五元 三月十元 六月十五元 一年三十元
第二版 一月三元 三月六元 六月九元 一年十八元
第三版 一月二元 三月四元 六月六元 一年十二元
第四版 一月一元 三月二元 六月三元 一年六元
○時事新報社 東京市本町三丁目
○電話 本局二二二二番 外局二二二二番

時事新報定費
時事新報は毎號八分乃至十二分にして詳細の商況物價の報載あり其代價運送料廣告料は左の如し
第一版 一月五元 三月十元 六月十五元 一年三十元
第二版 一月三元 三月六元 六月九元 一年十八元
第三版 一月二元 三月四元 六月六元 一年十二元
第四版 一月一元 三月二元 六月三元 一年六元
○時事新報社 東京市本町三丁目
○電話 本局二二二二番 外局二二二二番

時事新報定費
第一版 一月五元 三月十元 六月十五元 一年三十元
第二版 一月三元 三月六元 六月九元 一年十八元
第三版 一月二元 三月四元 六月六元 一年十二元
第四版 一月一元 三月二元 六月三元 一年六元

時事新報定費
第一版 一月五元 三月十元 六月十五元 一年三十元
第二版 一月三元 三月六元 六月九元 一年十八元
第三版 一月二元 三月四元 六月六元 一年十二元
第四版 一月一元 三月二元 六月三元 一年六元

時事新報

北海道は尙ほ未開地なり

近來新聞紙の傳ふる所又北海道に遊びし人の云ふ所を聞くに北海道は兩三年前大に面目を改めて復た舊時の北海道にあらずとて頗るに彼地の事情を嘆々する其有るは恰も北海道今日の進歩は殆んど内地に譲らずと云ふものゝ如し然れども其所謂内地に譲らずとは北海道一地方の繁昌は内地に異ならずとの意味か或は全邊の繁昌に内地に同じと云ふものか先づ其別を明にせざるは如何にも事實にして函館小樽札幌の如きは人口二萬の多きに達し家屋の構造市街の繁昌寧ろ内地府縣所在地に優るものあり所なす唯市街の壯麗斯の如きのみならず市外近郊の有様も少くも内地の田舎に異なる所なく時時種々を採り又函館近在には水田を既に開けて今日札幌の近邊にまで成るに水田を見るに至り此等の有様より推す時は北海道は内地に異ならずとは全くの事實にして我々も驚いて其事の廣く世人の知る所を爲らんことを希望して止まざる所なれども右一二の地方は北海道何百萬分の一に過ぎず其他は依然として荒莽荆榛を蔽ひ平原廣野天に連り膏土沃壤空しく放棄して顧みられざるは是れを尙は北海道今日の眞面目にして世人が往々一二地方の進歩に迷ふて全道の如何に評を下すは之を論へば人の面影に一二點の黒子あるを見て直に其人を黒色人種なりと云ふに異ならず其妄見誤評たる固より明白されば齒牙に掛くるに足らざるはどのみどあれども滔々たる天下時として之に驚かされて方向を誤る者なきにあらざるし斯る誤評の由て起りしは種々の原因ある中に其一二を挙げれば三年前北海道進歩者の増加したるに際し上流士人と稱する輩は汽船或は汽車に乘りて東京

より函館に安着し小樽札幌を経て室蘭に至り僅々二旬餘の間に全道中最も便利にして困難少なき場所を撰び陸路通過して以て北海の要領を得たりと爲し北海道は殆んど内地に異ならずなど附會想像の說を作して得々たる者なり又或は少壯の士にして北海道に赴き何がなる着實なる職業を求めんとし思はしき機會もなきより已れの手慣れたる筆紙を借りて内地風の政治論を製造すれば遂には眞面目なる土着の人までも之に乗せられて恰も一種の春意を催はし三五の友人一席の茶話も北海全道の輿論なりと稱し或は地方會議を開かんと云ひ或は國會議員を擧げんと云ひ果ては一切の人事政事を擧げて内地と同様ならしめんとする者さへあきりに非難都て是れ事の實際を離れたる虛空談と云ふも不可なきが如し抑も北地目下の有様は前に述べたる如く尙ほ純然たる未開地にして移民の營業に利を得ること容易あると共に失敗するとも亦容易なり勞すれば興り、逸すれば敗す、正に營利の戰場にして利益の外に餘念なき多忙繁雜の最中に地方の自治と云ひ國會議員の擧出と云ひ眼前の利益に縁なき政治論を論ずるも有爲の實業家にして誰れか耳を傾る者あらんや況んや漸く内地の風を移して衣冠文物を正さんと云ふが如きに於てをや唯、徒に人の冷笑を買ふに足る可きのみ従前北海道に限りて税法を殊にし徴兵を免するが如きも海陸の營利開拓を獎勵するの精神あらん事宜に適したる政法と云ふ可し衣食足りて禮讓興るとは古人の語されども我輩が今この語法を借用して北海道を評すれば利益興りて人事整ふと云はんと欲するものあり税法も法律も地方の自治も議員の擧出も今日論ず可き場合に非ず目下彼地に於ける人事政事の要は唯移民者をして自由自在に利を得せしむるに在るのみなれば官民共に此一方に若目して人言に惑ふもよく以て北地に固有する天與の利源を利し文物の整頓は之を數十年の後に期せんも我輩の冀望する所あり

雑報

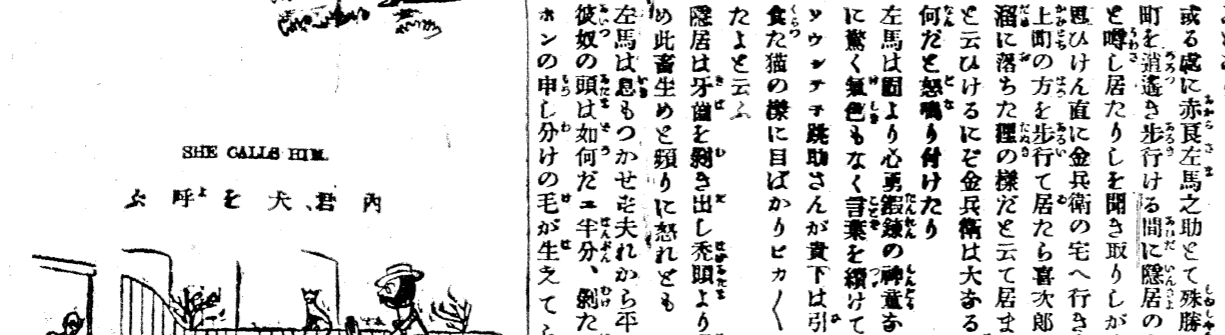
○衆議院の傍聴席 同院再議の傍聴席は總じて五百四十二席とし内皇族の分十席外國貴族及び貴族院議員の分六十席新聞記者の分二十席其他四百五十二席を公衆の分に充るよして第一期則ち燒出前の傍聴席に比すれば百五十二席を増したるものあり
○軍隊教育順序規則 一昨十六日陸軍大臣は軍隊教育順序規則を定め發表せしが第一條より二十一條にて完結せしものあり
○徳田勳重兵監 以教導團重兵監生徒隊長行軍實踐のたり武甲相殿豆地方へ向け一昨十六日出發せり
○中演技師 一昨十六日衛生試驗所長中演技師は國政學會の生徒四十餘名を引連れ横濱に出張し同地水道に就き實地を檢分したるよし
○護士法案に就て 昨年の議會に於て同案は遂に成立せりしか本年は最早議會の開期も切迫したればとて去る十三日勳臣の代行人議會に於て小笠原久吉氏外十

數名の委員を撰らひ遠からず其筋へ同法案の下附を乞ひ右に關する運動を始むるよし

笑話

心勇外國笑話(譯)
勇氣に二種類あり 一は精神の勇氣にして之を心勇と云ひ一は肉體の勇氣にして之を體勇と云ふ體勇へは體勇小刀を便に手負猪に向ふは體勇にして遠足の歸りに體勇の勇を養ふるが如きは心勇なり體勇を示すには弓矢鎗砲槍刀又は打拳杯と夫れ一場合に由て相應の武器を用ひねば成らぬに由て多少の資を要するものと云ふが爰に心勇もその面白きものなれど一文の費なくして忽ち功名を博するものと稱代なり彼の敵れたる種を衣て威嚇を衣る者と立て面して恥ぢざるが如きは心勇の頂上なれども手裏の種は種々の着物と鐵面の皮のみ至て鐵あるのみならず世の道徳先生達は體勇は人畜共有の體性にして賤じ可し唯、心勇は萬物の靈たる人類の體性にして貴く可しとて只、心勇を養ふは或して止ざるものと云ふれば世人もツイの樣を見て迷を起し勇氣を振ふに何を必すしも汗水流して腕力を用ふることを爲んや心勇も手裏にして面白しと思ふ者もあらんかかれども待てしはし驚と思案を運らすときは心勇手裏に似て決して手輕からず之を實行するには千辛萬苦のみか其辛若は却て第二の辛若を買ふの資本と爲りて詰り詰りに合はぬ場合も多ければ先づ以て願下げの方然る可し

今道徳論者の講する心勇説を聽くに第一、囊中に錢を養ふ可しと云ふ
爰に伊久寺奈四郎は兼々此説を信じて之を實行せんと心掛け居りしが或る日の事なり其内君が二年の間、味噌汁を薄くし粥を啜りて貯へ置きたる大枚五圓と云ふ私房銀を算筒の小現出の裏手する隠しより取り出して夫に渡して之を子帯の帯と置甲の弁とを買ひ來れど命じければ奈四郎は委細承知と外へ出でたる其途中にて人もあろうに借金に確と行き選ひたり爰に心勇の行り所、その期を外して復何時かあらん心勇歸依の奈四郎は無難なる説彼の虎の子の五圓をばソックリ其まゝ人非人の吝嗇家の高利貸に手渡し我も後生の憂はれて真如の月を眺め明さんと口説みつゝ吾家に歸り來りしにその内君は事の本末聞かぬ終つて馬鹿畜生、二本棒、腰抜けの無氣地者、問掛けのツ抜けのス抜け野郎と口舌たたく種々様々の悪口をつき鳩尾の邊を搦木にて突き飛ばしたるものと都て四回、奈四郎も其後は一寸と御覽
いゝ工夫だ
ろう白を
の細で
で置てや
たよゴムの
伸縮がある
から勝手次
第に狂ふ
どが出来
よマア呼で



SHE CALLS HIM.
女呼を犬君内

心勇の實行を見合せたりしが唯氣の
にして十三年後迄も更に解くる日と
正直の頭を神やとる正直を敬する
勇論者が驚歎第二の眼目なり
此訓諭の趣意は譬へば君、若し五圓
持主に返したりと云ふ人あるを聞か
力車を走らせて其人の宅に至り正
に目に掛りますが君の正直を敬する
君はマアカ知斯に途外れに正直を
たよ實はマア僕は君を敬す、つきの
今と云ふ今迄思ひ込んで居たのす、
着切でなくいふに處言つてさ
實に見上げた手泥棒をしさうな顔
實に見掛に由らぬいふんだ君が其
よマア巾着切もしないで居るで
く、嬉し涙が溢れるよなにか
可しとのふとあれども油断は
は正直者に限りて疝瘕高く馬鹿者
萬一も正兵衛とんが此丁寧なる挨拶
腹を立て人は見掛けに由らぬいふ
の面が泥棒に似て居ると云ふのは
當ふするのだからん堪忍はあらぬ
て掛るともあらんには此方の深切
引の人力車で頼の痛をいたしに
心勇論者第三段の説教に誠と云ふ
みどあり
或る處に赤良左馬之助とて殊勝
町を消遣き歩行ける間に隱居の金
と時居たりしを聞き取りしが左
思ひけん直に金兵衛の宅へ行き金
上町の方を歩行て居たら喜次郎
溜に落ちた様だぞと云て居まし
と云ひけるにぞ金兵衛は大なる
何だぞ怒鳴り付けたり
左馬は固より心勇論者の神童され
に驚く氣色もなく言葉も續けて
ソウナア跳助さんが貴下は引越
食た猫の様に目ばかりヒカカして
たよと云ふ
隠居は牙齒を割き出し禿頭より湯
め此畜生め頻りに怒れども
左馬は息もつかせず夫れから平助
彼奴の頭は如何だマア半分、割た
ホンの申し分けの毛が生えてら